

大垣さん追悼

高田宜武

大垣さんのなされた仕事について、私が何かまとまった事を書くことは難しい。潮間帯の貝の研究を始めてから、幾度も大垣さんの論文を読み、真似をし、引用した。しかし、今ここで私自身の思いは散り散りになって焦点を結ばない。大垣さんがなされた多方面にわたる仕事を、しっかりと理解できていればと思う。私が受けとめられたのは一部分にすぎないが、個人的にはいくつもの場面で大きな影響を受けた。

白浜におられた大垣さんをお訪ねした機会があった。私が学部修了後の進路を決めかねていた頃である。海の事も研究の事も何も知らない私に、臨海実験所での研究生活について、いろいろなお話をしてくださった。大学院生という生活もあるのだ、と思った。私も巻貝の研究を始め、出来た論文別刷を迷惑も顧みずお送りし、何らかの感想をいただけるだけで大満足であった。

石垣島に移って研究されていると聞き、いつかは私も真似をして石垣に行きたいと思った。しかし、俗物の私には大垣さんの生活スタイルを真似する事は出来なかった。大垣さんの研究テーマの一つであったウズラタマキビ類を見たいと思い、石垣島のマングローブで樹上性のタマキビ類を探し歩いた事がある。意外に低密度で、見つけるのにコツが必要だった。同じフィールドに立ち、なぜこの研究テーマを選択されたのかと思いを巡らせた。石垣島で赤土流出問題に取り組む事になったのだが、そのときにも大垣さんの先行研究にお世話になった。社会的にも関心を持たれるテーマに、科学的なデータで迫っていく大垣さんの立ち位置の取り方に感銘を受けた。

その後は、時々学会等でお目にかかった折にお話を伺う事ができた。特に、統計的な理屈や方法についての話題が多かったように記憶している。当時は、Underwood らに代表される分散分析による仮説検定型の研究が隆盛であった。その分散分析の前提条件として等分散性を確保するために、データの変数変換をおこなっていたのだが、変数変換にどういう意味があるのかと、改めて問われた事がある。私は、比率にはアークサイン変換などと教科書通りの手続きとして考えていた。こういう場面で、生態学的な意味を探求する大垣さんの姿勢に衝撃をうけた。また、重ね枠による全域調査とランダム配置コドラートによる標本調査の違いについても、興味深くお話を伺った。無限の標本が得られると仮想する仮説検定型の研究と、時系列や空間配置に留意し現実の世界に寄り添うモニタリング予測型の研究の、研究スタイルの違いについて考えさせられた。大垣さんのおかげで、仮説検定一辺倒では立ち行かない研究テーマがある事を教えられたと思っている。

やはり大垣さんの真似をしたくて、科学哲学の本を買い集めた事があった。頑張って読んでみて、活字を追っている間は理解したような気になっているのだが、本を置いてしまってもう思い出せない。哲学書から得た概念に使う海洋生物を材料に思考実験をしてみるとというような実りのある読み方が出来ればよかったのだが、あまりに私の力不足であった。

出不精がたたって、アルゴノータの会合には、結局一度も参加する機会を作れなかった。今から思えば残念な事をした。遠くから駆けつけた熱心な参加者の方々もおられるので、言い訳も出来ない。大垣さんが掘り出された様々な研究テーマを、随分あとになって追いかけていたような気がする。タイミングの悪い追っかけだと自分でも思うのだが、今後も残された著作を読み、少しでも身につけ、追いつけるよう精進したい。

(たかだ よしたけ・日本海区水産研究所)